S2-5

高次脳機能障害患者における受傷時意識消失時間と ADL・精神機能・DTI との関係

和田 哲也[1,2]、浅野 好孝[1,2]、幅　拓矢[1]、松本　優[1]、糟谷 幸徳[1]、槇林　優[1]、篠田　淳[1,2]

[1]木沢記念病院　中部療護センター、[2]岐阜大学大学院　医学系研究科　脳病態解析学講座

【諸言】頭部外傷に伴う意識消失時間（LOCDur）は患者の予後予測に有用であり、頭部外傷の重症度評価にも使用できると言われている。そこで、当院の頭部外傷後の高次脳機能障害外来患者を対象に LOCDur と日常生活動作能力、精神機能、Diffusion Tensor Image (DTI) との関係を検討した。

【方法】対象は当院高次脳機能外来に自力歩行で来院され、神経心理学的検査が測定可能であった患者 33 名とし、意識消失時間によって 3 群に分類した。Mild group(n=14, LOCDur ＜ 1 時間)、Moderate group(n=10, LOCDur:1-24 時間)、Severe group(n=9, LOCDur ＞ 24 時間)。測定は Barthel Index(BI)、神経心理検査（WAIS－III, MMSE)、3T-MR 装置を用いて DTI を施行し、FAmap を作成した。FAmap は SPM8 を用いて前処理を行い、各群間と健常人データベースとを比較検討した。

【結果】BI、WAIS-III（VIQ, PIQ)、MMSE の結果は 3 群間で差を認めなかった。Mild group の FAmap は有意に低下している部位はなく、Moderate group では小脳脚、基底核、脳梁に低下部位が描出され、Severe group では Moderate group の低下部位に加えてより広範囲に帯状回などが低下部位として描出された（$p < 0.001$）。

【結語】ADL 上自力歩行で外来通院しているというバイアスをかけた場合、LOCDur は日常生活や精神機能には関与しなかったが、FA を指標とした脳損傷の程度とは関連を認めた。